

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

エリアス・カネッティ『群衆と権力』の軌跡

氏 名

樋口 恵

## 論 文 内 容 の 要 旨

エリアス・カネッティ(1905-1994)は、スペイン系ユダヤ人として生まれ、二つの大戦を擁する激動の 20 世紀を生き抜いた作家である。ナチス政権下、群衆と権力の結びつきを看取したカネッティは、約 30 年にも及ぶ研究の末、『群衆と権力』*Masse und Macht* (1960)にその思索を結実させた。『群衆と権力』は様々な民族の神話や伝承を題材にし、既存のいかなる学問にも与することなく、独自の術語によって群衆と権力を描写している。その特異な叙述形式により、この書はいったいどのような学問領域に位置づけられるのか、あるいは、そもそもこの書は学術書なのか、それとも文学なのか、という議論が生まれた。『群衆と権力』は、特にカネッティが 1981 年にノーベル賞を受賞して以来、様々な観点から論じられてきたが、その評価は出版から半世紀以上が経った今も定まったとは言えない。本論考は、こうした議論を前提とし、『群衆と権力』がどのような思想の潮流のもとに生まれ、どのような思想の過程を経て完成されたのか、その軌跡を辿ることを目的とする。本論考は、「序論」と五つの章（第一章～第五章）、そして「結び」から構成される。

第一章では、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて刊行された、五人—ニーチェ、ギュスターヴ・ル・ボン、ガブリエル・タルド、ジークムント・フロイト、そして、オルテガ・イ・ガセット—の論考を取り上げ、その中で「人間の集団」というものがどのように論じられてきたのかを考察している。そして、そこから群衆論の系譜というべきものを導き出し、その中で『群衆と権力』がどのように位置づけられるのか、それらの論考がカネッティの思索に与えた影響を探っている。それら群衆論の系譜においては、考察の対象が時代を経るごとに、空間を共有する人の群れとしての群衆から、互いに離れたところにながらも同じ意見や感情を共有する公衆、あるいは大衆に移っていった。しかし、カネッティはこの流れに逆行し、「一カ所に集まる人の群れ」を念頭にしている。また、カネッティの群衆観と他のそれとの決定的な差異は、それらが群衆を外部から観察して、時には恐怖や嫌悪の目で眺めたのに対し、カネッティは

群衆という現象にあらゆる人間が平等になる一種のユートピア的な解放状態を見たことである。群衆形成における指導者の不在を指摘した点でも、『群衆と権力』は他の群衆論と一線を画している。

第二章から第四章では、カネッティの戯曲三編『結婚式』 *Die Hochzeit* (1931-32年執筆)、『虚栄の喜劇』 *Komödie der Eitelkeit* (1933年執筆)、『猶予された者たち』 *Die Befristeten* (1952-1953年執筆)を扱った。これらの戯曲群はいずれも、カネッティが群衆と権力に関する包括的研究を始めた1930年代以降に書かれている。また『群衆と権力』の論述に際して中心的役割を担う、「生き残ること」、「命令」、「パラノイア」、「変身」、そして「死」といったテーマを共有している。これらの戯曲群を時系列に沿って考察し、その群衆観・権力論を辿ることにより、『群衆と権力』へと至るカネッティの思想の変遷を探った。

第二章で論じた『結婚式』には、群衆らしい群衆は登場せず、カネッティの群衆観は作品内に表れていない。しかし、権力に関する一考は見られる。家族という最古の共同体を舞台に、「生き残ること」をめぐる権力闘争が描かれているのである。また、ナチスのイデオロギーの基盤ともなった、家父長的権力がテーマとされている。

第三章で論じた『虚栄の喜劇』では、群衆形成の過程に焦点が当てられている。人々が自己像を棄て、個人を犠牲にすることによって成立する、全体主義社会が描かれていた。群衆内部での平等状態を求めて人々は群衆となるが、この平等状態は群衆内部でのみ可能であるため、密集状態が解消されると人々は再び不平等になる。それゆえ、一人の指導者のもとでの絶対的平等を獲得するため、人間は一人の権力者を擁立する。群衆と権力者の相互依存によって成り立つ全体主義社会が、そこには描かれている。

第四章で論じた『猶予された者たち』では、「生き残ること」をめぐる権力の問題がより先鋭化された形で表れている。そして、「生き残ること」という権力の根源とも言える感情を、いかに克服するのが示されている。また、監視の働きによって権力が網の目のように張り巡らされた社会、管理社会が描かれている。

これら三篇の戯曲は、「生き残ること」や「変身」といった、『群衆と権力』における主要な概念を共有しながらも、また、権力と群衆という一貫した主題を軸にしつつも、「家父長的権力」、「全体主義社会における権力」、「生き残ることの克服」など、『群衆と権力』には描かれていない新しいテーマを提示しているのである。

第五章では『群衆と権力』の特異な叙述形式に焦点を当てている。なぜカネッティは先行する群衆論や権力論には一切触れずに、同時代に起きた事件にも言及せずに、また、いかなる既存の学問の概念も用いずに、独自の術語で論考を行ったのか。なぜ文化人類学に傾倒し、心理学を否定したのか。そして、なぜ詩的描写を行ったのか。それは、あらゆる時代と文化に通底する群衆と権力の諸相を、開かれた形で、読者に提示するための試みだったのである。